

物語作家ラーゲルルーヴの語り
—小説『御者』における登場人物の語りを中心に—

スウェーデン語専攻 水崎千尋

目次

1. はじめに
 2. 物語作家としてのラーゲルルーヴ
 - 2.1. 経歴
 - 2.2. 作風と文体の特性
 3. 『御者』 *Körkarlen*
 - 3.1. あらすじ
 - 3.2. 作品背景
 4. 作品分析
 - 4.1. 登場人物の持つ役割
 - 4.1.1. 浮浪者・ダヴィッド・ホルム
 - 4.1.2. シスター・エーディット
 - 4.1.3. 死神の御者・ゲオルク
 - 4.2. 死神の馭者・ゲオルクの語り
 5. まとめ
 6. おわりに
- 使用テキスト
参考文献
インターネット上の資料

要旨

Selma Lagerlöf(セルマ・ラーゲルルーヴ, 1858-1940)はスウェーデンの文壇で活躍した国民的作家である。過去の研究によるとラーゲルルーヴの物語は死と生, 善と悪, 見えるものと見えないものといった「対極のモチーフ」が用いられることが特徴的である。また, その境界が曖昧になっており, 登場人物はその両極を移動しているとされる。そこで, 筆者はラーゲルルーヴの新たな語り特性として, 相反するものを繋ぐ「仲介者」としての側面を見出せないかと考えた。ラーゲルルーヴの語り特性としてもう一つ挙げられるのが, 「間接的な語り手法」である。彼女の作品では, 地の文の代わりに, 登場人物の台詞の中で物語が展開していくことが多い。とりわけ『御者』*Körkarlen*(1912)は, 対極のモチーフとその超越が, 登場人物, とりわけ死神の馭者による語りによって描き出される。よって『御者』における登場人物の語りの分析を通して, 「仲介者」としてのラーゲルルーヴについて考察するのが本稿の目的である。

1章では, ラーゲルルーヴの語り特性と研究内容を述べた。続く2章では, 彼女の作家としての経歴や作風について述べた。

3章では『御者』の作品背景と物語のあらすじを示した。作品のインスピレーションの元となった小説や北欧の文化的背景などを紹介した。また, ラーゲルルーヴが手紙の中で, 読者に対して「美しいメッセージ」を重視し, 文学作品はあらゆるものを運び込む架け橋であると綴っていると述べた。ここから, 『御者』は作者ラーゲルルーヴが「美しいメッセージ」を読者に伝えるために描かれた作品であると読み取れることを示した。

4章では『御者』における語りを行う登場人物を「語り部」と定め, 登場人物の語りを分析した。それに先立って, 4.1節では, 3人の登場人物のキャラクター性を分析し, それぞれの登場人物の持つ役割について述べた。

まず, 主人公ダヴィッド・ホルムの持つ役割を分析した。彼は酒浸りの落ちぶれた男で, 妻への大きな憎しみを抱えた悪人として描かれる。しかし, それは生前のゲオルクがダヴィッドを酒浸りの生活へ誘い込んだことに起因する。よって, ダヴィッドが生来からの悪人ではないことを述べた。また, 致命傷を受け倒れたダヴィッドの魂は肉体から抜け出し, 「見えないもの」として「語り部」の語

りを静観していることに言及し、彼が「語り部」と聞き手に認識されない傍聴者という役割を持つと考察した。さらにダヴィッドを俯瞰するのが読者であるという語りの構造に着目する。物語序盤は「語り部」によってダヴィッドの過去が語られ、読者だけが新しい情報を受け取る。つまり、両者の認識に違いがあるといえる。物語が進むにつれて、両者は同時に新しい事実を認識してゆく。このような語りの構造により、ラーゲルルーヴはダヴィッドと読者を「姿の见えない聞き手の一人」として徐々に同化させていると考察した。

次に、シスター・エーディットの持つ役割を分析した。彼女はダヴィッドと対照的な「善」なる存在である。一方、彼女がホルム夫妻を引き合わせたことでダヴィッドの妻を不幸に陥れてしまい、妻子がいるダヴィッドを愛していることに言及し、エーディットが完全な善人として描かれていないことを示した。またシスターとして「救済する者」であったエーディットは、魂を解放されることで「救済される者」になったといえる。このように、物語の中で、対極のモチーフの垣根を移動するというエーディットの役割を見出した。

最後に、死神の馭者・ゲオルクの持つ役割を分析した。彼は死神の馭者として魂を解き放つだけでなく、『御者』という物語の全知の語り手であることを示した。彼は物語の一登場人物が知り得ないはずの、他の登場人物の心情を把握している。よって、ゲオルクはこの物語のいわば神の視点を持つラーゲルルーヴと重なる部分を持つ存在で、作者の言葉を代弁していると考察した。

続く4.2節では、物語で重要な位置を占めているゲオルクの語りの場面に焦点を当て、彼の語り方が物語をどのように動かしているのかを分析した。これまでの作品分析を踏まえて、物語終盤でゲオルクがダヴィッドに託した言葉は、ラーゲルルーヴがこの物語を通して読者に向けたメッセージと同一であると述べた。

5章ではこれまでのまとめを述べた。『御者』は、登場人物による語りの構造をとることで、作品自体が読者と作者を繋ぐ架け橋として機能する作品であると位置付けた。以上から、対極のモチーフや物事の持つ二面性の探究の中でそれら両方を受容し、その境界の超越を描くというラーゲルルーヴの語り特性を、「仲介者」と見なすことができると結論付けた。

6章では、ラーゲルルーヴがこの作品を通して伝えたメッセージについての筆者の解釈を述べ、本稿のまとめとした。